防災だより 2023 年 05 月号

第 39 号
令和 5 年 05 月 28 日発行 関ヶ谷自治会 防災部/防災ボランティア･グループ
☆対策本部支援チーム☆情報･配給支援チーム☆救助･補修支援チーム☆企画部 自治会館☎784－4447

珠洲市で震度６強の地震発生

～「長周期地震動」の緊急地震速報が初めて配信された～

５日午後２時 42 分頃、石川県能登地方を震源とする地震があり、石川県珠洲（すず）市で震度６強の地震が発生しました。気象庁によると、震源の深さは 12 キロ、地震の規模を示すマグニチュードは 6.5 と推定されいます。その後も震度５強の大きな地震が発生しています。

今回の地震では、２月から運用が始まった**「長周期地震動」の緊急地震速報が初めて配信されました**。長周期地震動は高層ビルを大きく揺らすゆっくりした揺れで、**石川県能登地方では、４段階で２番目に揺れが大きい「階級３」が観測**されました。

気象庁では、**緊急地震速報の発表の際に「長周期地震動」の階級３以上を予想した地域にも速報を発表**します。長周期地震動の特徴や規模、発表された際にとるべき行動を確認しておきましょう。

長周期地震動とは、地震が起きると様々な周期を持つ揺れ（地震動）が発生します。ここでいう「周期」とは、揺れが１往復するのにかかる時間のことです。規模の大きい地震が発生すると、周期の長いゆっくりとした大きな揺れ（地震動）が生じます。このような地震動のことを長周期地震動といい**揺れの大きさを「長周期地震階級」**で表しています。

長周期地震動階級（下表）とは、固有周期が 1～2 秒から 7～8 秒程度の揺れが生じる**高層ビル内における、地震時の人の行動の困難さの程度や、家具や什器の移動・転倒などの被害の程度から ４つの段階に区分した揺れの大きさの指標**です。

地震階級	揺れの感じ	人の体感･行動	室内の状況	備考
長周期地震動階級4	極めて大きな揺れ	立っていることができず、はわないと動くことができない。揺れにほんろうされる。	キャスター付き什器が大きく動き、転倒するものがある。固定していない家具の大半が移動し、倒れるものもある。	間仕切壁などにひび割れ･亀裂が多くなる。
長周期地震動階級3	非常に大きな揺れ	立っていることが困難になる。	キャスター付き什器が大きく動く。固定していない家具が移動することがあり、不安定なものは倒れることがある。	間仕切壁などにひび割れ･亀裂が入ることがある。
長周期地震動階級2	大きな揺れ	室内で大きな揺れを感じ、物につかまりたいと感じる。物につかまらないと歩くことが難しいなど、行動に支障を感じる。	キャスター付き什器がわずかに動く。棚にある食器類、書棚の本が落ちることがある。	－
長周期地震動階級1	やや大きな揺れ	室内にいたほとんどの人が揺れを感じる。驚く人もいる。	ブラインドなど吊り下げものが大きく揺れる。	－

ご近所の変化を見逃さないない「近助力」が大事！

民生委員　第一地区担当　生駒　多美子

先日実際にあったことです。お一人暮らしのお宅の洗濯物が夕方になり雨も降っているのに取りこまれないままでした。気が付いたお隣の方がインターホン押しましたが応答がありませんでした。後日分かったことが、外出先で転んでケガをして入院されていたそうです。もう一つ、ご近所の方がいつもなら開いている雨戸がずっと閉まったままでしたが、連絡先も分からないので苦肉の策として警察に通報して来てもらい、「〇〇さ～ん!?」と声をかけたり、ドアや雨戸をノックされたところ、家の中から声が聞こえました。確認したところ、前日からずっとトイレから動けなかったとのことでした。３つ目は、一人で暮らす父親に一度は必ず電話される息子さん、その日も電話しましたが応答がありませんでした。心配でかけつけられたところ亡くなられていた、という悲しいお話も伺いました。

昨今「個人情報」という言葉に敏感に反応されるのはやむを得ないことと思いますが、いずれの場合も**「異変に気づき合える近所付き合い（近助力）**の大切さを考えずにはいられませんし、お一人暮らしのご本人やご家族が、何かあった時の為に、連絡先を信頼できる近所の方や友人に伝えておかれたらまた違った結果になっていたのではないかと考えてしまいます。

通報した後も何もできないままただただ見守って、ご無事を祈っておられたであろうご近所の方々のお気持ちを思うと、いたたまれなくなりました。民生委員になったばかりの頃に同じような経験をしたからです。連絡先を警察にも伝えていない方がいらっしゃると知って驚きました。

関ケ谷を「終の棲家」と思い定めて、ご近所の方にも支えられ一生懸命暮らして来られた人生の先輩方に何人もお会いしてきました。これからもずっと**「個人情報の壁」を乗り越えて、赤ちゃんから高齢者まで、支え合えるご近所付き合い**を大切にしてゆきたいと思います。

2022 年関ヶ谷地域における震災時の危機対応に関する調査結果のポイントー１

～報告者：関東学院大学 社会学部　細田 聡～

４月 24 日（月）、午前９時 45 分より昨年 11 月 15 日に行った「関ヶ谷地域における震災時の危機対応に関する調査結果」の報告会が開催されました。当日は自治会役員、地区長、防災部および防災ボランティア・グループメンバーなど総勢 30 名弱が参加されました。

アンケートを企画集計した関東学院社会学部部長細田先生より、約２時間にわたりアンケート結果の説明をいただきました。本アンケートアンケートの目的は、

①大震災が発生した際の想定される状況を把握する

・震災に備えた事前の取り組み状況

・災害時要支援者と支援者の状況

②関ヶ谷地域の強靭性と脆弱性を明確化する

です。

アンケート対象者は「関ヶ谷地域居住者」、配布数：1,130 世帯、回収：415 世帯（有効回答率 38%）でした。アンケート居住者基本データとして、回答世帯数:415 世帯、居住者数:945 人、平均居住者数：2.28 人、家族構成：２人暮らしが過半数であり、１人暮らしは 15%弱、性別・年代：男性 44%、女性 51%、不明 5%、70 代 31% 、80 歳以上 20%でした。

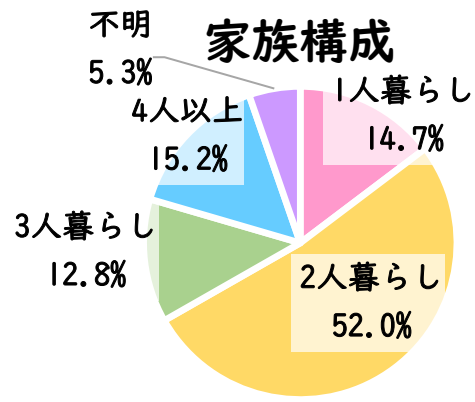
関ヶ谷地域での地域活動・連帯性では、地域活動・防災訓練への参加地域活動への積極的参加度は 48%、防災訓練への積極的参加度は 77%、平常時・災害時連帯性では、平常時・災害時ともに８割強の高い連帯性 ⇒ **共助体制構築は充分可能**、とのことでした。これからもこの面は継続していけるよう住民各位の共助意識を高めることが必要です。

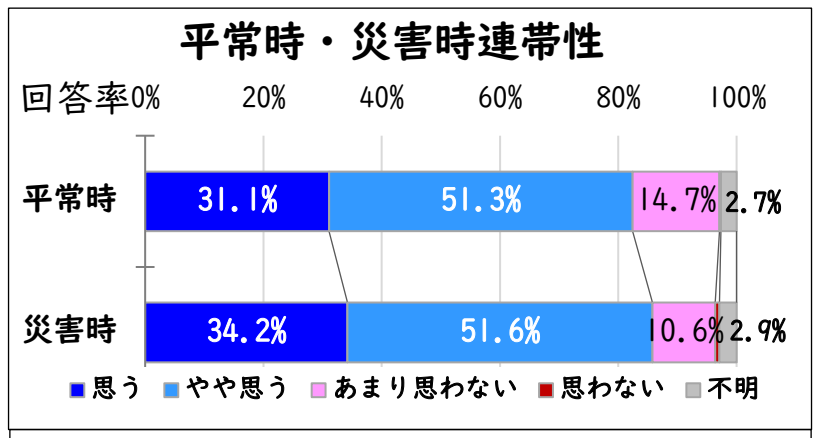
災害のイメージとして、雪が降る深夜、震度７クラスの大震災が南関東で発生、電気・ガス・水道が停止、インターネットは何とか使える状態交通機関は停止となり、道路に亀裂が走り自動車は通行不可公的機関による救助・救援は１週間後避難所の西金沢学園には、緊急時用の自家発用発電あり“陸の孤島”となった状態で、１週間乗り切る必要がある、として回答いただきました。

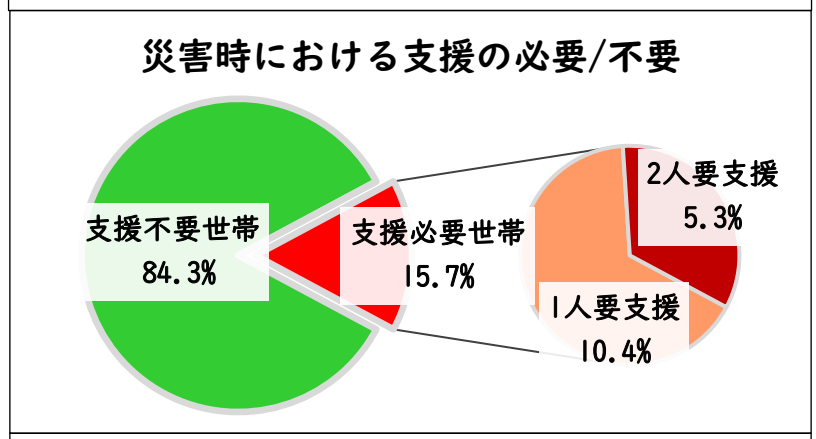
その状況下での「要支援者」は、災害発生１週間以内の生活上の要支援世帯および人数割合は、**支援必要世帯 65 世帯(16%)**、支援不要世帯 350 世帯(84%)、**要支援者１人の世帯：10%（43 世帯）、要支援者２人の世帯:5%（22 世帯）。支援を必要とする人数 10%弱（87 名/945 名）**。要支援者の性別：男性 45%(39 名)、女性 53%(46 名)、不明 2%(2 名)。

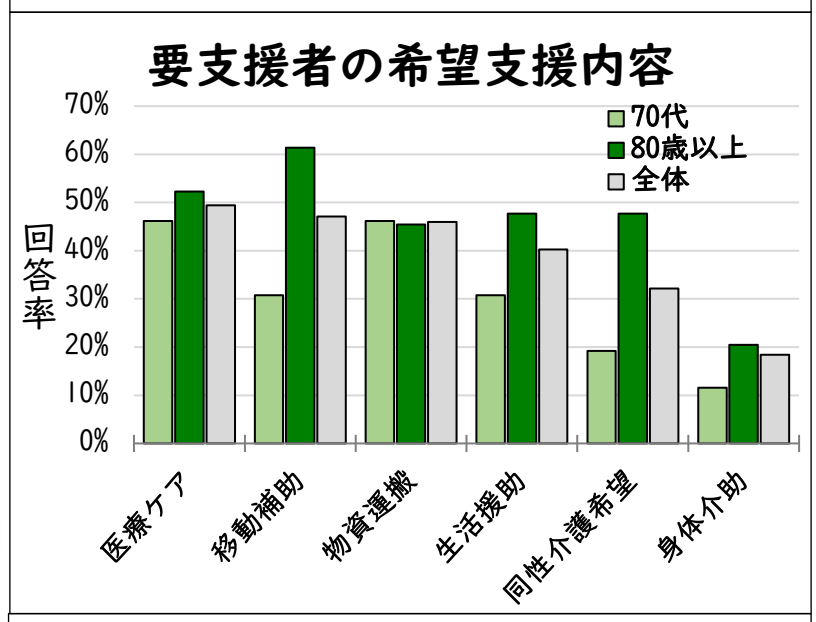
要支援者の年代と支援内容は、**要支援者の年代：要支援 87 名のうち、70 代：30%(26 名)　80 歳以上：51%(44 名)**。要支援者の**希望支援内容全体では、医療ケア･移動補助･物資運搬･生活援助と続く**。80 歳以上では、70 代よりも各項目の支援希望率が高い。

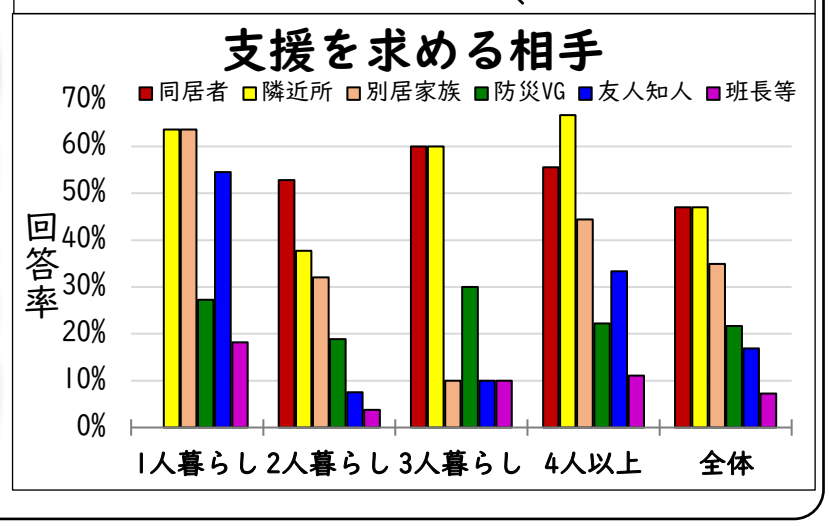
次に、支援要請の相手はだれかでは、家族構成により支援を求める相手の比率が異なる。**全体的には、同居者や隣近所に支援を求める比率が高い**。一人暮らしでは親近者の隣近所･別居家族･友人知人に求める傾向が見えます。どの世帯に**共通する支援を頼むのは、同居家族以外では「隣近所」が高く**なっています。隣近所の方とは普段からの密なコミュニケーションが必要ではないでしょうか。以降、順次報告を掲載していきます。











【関ケ谷地域における災害時の危機対応に関する調査結果報告会に参加して】

防災部　芳尾　寛子

この４月から９月までの前期の地区長をお引き受けし、防災担当となりました。仕事をしているため、どれだけお力になれるかわからず、不安でしたが、できるところでがんばろうと、今回は職場をお休みできたので、報告会に参加してみました。

参加して、とても良かったです。私は、関ケ谷に引っ越しして、６年目で、また仕事をしていることもあり、日常の生活の中では、ほとんど近所の方と関わることがないのが実際です。

今回、関東学院大学の細田先生の報告を聞き、アンケートから、関ケ谷の地域の方たちは、何かあったら、助け合いたいと思っている方々が８割いるという結果がわかり、なんて素敵な地域なんだろう、とあらためて関ケ谷地域の魅力を再確認することができましま。

助けてあげたいと思っている人がたくさんいるけど、どう助けたらいいかわからない、どう助けを求めていいかわからい。というのが、課題だとお聞きし、顔の見える関係や、そこに対応できる組織づくりが防災の課題なのかな。と考えることができました。

また、私は保育園で園長の仕事を今しているのですが、災害時は、乳幼児や、乳幼児をもつ保護者支援もとても大切になってきます。赤ちゃんやこどもも、大人の姿を見て、とても我慢した生活を強いいられてしまうことも予想されます。高齢者への支援とともに、こどもやこどもを持つ親の支援も今後、アンケート調査もとっていただきながら、みなさんと一緒に考えていければ、さらに安心できる防災対策へとつながると思いました。

とても考えさせられる、素晴らしいアンケート調査報告会をありがとうございました。